

# 青年期女子における挫折経験がスチューデント・アパシー傾向と生きがい感に及ぼす影響

The influence to a frustrating experience on apathy and the feeling of a life worth living among adolescent women

須藤 瞳

跡見学園女子大学大学院  
人文科学研究科臨床心理学専攻

Hitomi Suto

Graduate School of Humanities  
Division Clinical Psychology  
Atomi University

宮岡 佳子

跡見学園女子大学  
心理学部臨床心理学科

Yoshiko Miyaoka

Faculty of Psychology  
Atomi University

## 要 約

【目的】挫折経験および挫折経験のとらえ方がスチューデント・アパシー傾向と生きがい感にどのように影響しているのかを検証することを目的とした。【方法】女子大学生1～4年生312名を対象に質問紙調査を行った。質問紙は①フェイスシート（年齢、学年、挫折経験の有無、挫折経験をした年齢と内容）②挫折経験のとらえ方尺度（姜・清沢、2017）③アパシー傾向測定尺度短縮版（箭本・鈴木、2017）④生きがい認知尺度（熊野、2012）である。【結果】①挫折の有無におけるt検定の結果、挫折を経験したことがある者ほど挫折をネガティブなものとしてとらえ、生きがい感が低くなる傾向があることが明らかになった。また、挫折を経験したことがある者ほど「学業への積極的姿勢」が高いことが明らかになった。②重回帰分析の結果、挫折経験をネガティブにとらえることは生きがい感に負の影響を与え、スチューデント・アパシー傾向に正の影響を与えることが明らかになった。また、挫折経験をポジティブにとらえることは生きがい感に正の影響を及ぼすことが明らかになった。③挫折を経験した年齢において、16歳以下を低年齢群、17歳以上を高年齢群とし、t検定を行った。その結果、挫折経験を高年齢時にした者ほど挫折をポジティブにとらえること、学業に積極的に取り組む姿勢があること、生きがい感が高いことが明らかになった。【考察】青年期女子において、挫折を経験することで心理的苦痛をうけるものの挫折をポジティブに考えることができ、ポジティブに考えることで生きがい感を高くし、スチューデント・アパシー傾向を低くすることができると示唆された。

【Key Word】青年期、挫折、スチューデント・アパシー、生きがい

## I. 問題と目的

青年期の最も重要な心理社会的発達課題は、青年がいかにしてアイデンティティを確立していくかという点にある (Erikson, 1959)。しかし、アイデンティティを確立するために乗り越えなければならないものが多く存在する。その一つとして、挫折がある。萩原ら (2013) は、挫折経験の克服とアイデンティティ確立が関係していることを報告している。

挫折は青年期の約7割が経験していることが示されている (神原, 2009)。また、挫折は時として青年の人格的成長に寄与し、その思考や行動にも少なからざる影響を及ぼすと考えられる (神谷・伊藤, 1999)。これらから、青年は少なからず挫折を経験し、挫折に対して苦悩することが考えられる。

では、挫折はどう乗り越えていくのだろうか。古木・森田 (2009) は、大学生を対象にして挫折経験から自己受容に至るプロセスを半構造化面接によって質的に検討しており、挫折を経験した直後には、「良い結果を出せない苦しさ」や「自分を信じられない」に移行するが、「ピアの存在」の支えの中、「現在の自分への満足」や挫折経験を「良い経験・思い出」ととらえたり、「自己成長感」を持てるようになり、「挫折をした自分自身の受容」の経験に至ることを示している。このことから、挫折をどうとらえるかが重要であることが考えられる。

青年期のもう一つの問題として、スチューデント・アパシーが挙げられる。スチューデント・アパシーとは、「①精神病の無気力と異なる、②心理的原因から生じ

る、③主として学生の本業とされる学問に対しての意欲の減退を示す」(西村, 2012) 状態のことである。馬場 (1976) は、アイデンティティの拡散をスチューデント・アパシーの重要な発生源の一つと指摘している。また、高塚 (2018) は、アパシー化する者は優等生として評価を受けていた者が多く、そういった者が挫折感を味わうことによってアパシー化する可能性があることを述べている。しかし、今までに挫折とスチューデント・アパシーに関する研究は少ない。

また、藤原 (1970) は、自分自身を模索する青年期ほど人生の意味を求めるとし、青年期のアイデンティティと生きがい感が密接に関係していることを述べている。また、ネガティブなライフイベントを体験すると生きがいを感じる程度は低くなるということが明らかにされている (熊野, 2005)。

その他の挫折の研究として、姜・清沢 (2017) は、辞書(「明鏡国語辞典」)における挫折の定義である「事業・計画などが途中でくじけ、だめになること。また、そのためにやり遂げようとする意欲や気力をなくすこと。」をもとに、研究の対象者が大学生であることを考慮して「学業、人間関係、部活動などが途中でくじけ、だめになること。また、そのためにやり遂げようとする意欲や気力をなくすこと。」と再定義し、挫折のとらえ方の尺度を作成するために調査を行っている。その調査において、挫折経験を「自己成長」のように積極的にポジティブなものとしてとらえることは、自己や対人場面においてポジティブな影響を及ぼすことが明らかになった。一方、ネガティブなとらえ方は「自己脆弱感」に

つながりやすく、「ダメージ」のようなとらえ方は、対人場面にもネガティブな影響を及ぼすことが明らかになった。このことから挫折をポジティブなものとしてとらえている者は、生きがい感が高く、スチューデント・アパシー傾向が低いことが考えられる。

以上のことから本研究では、挫折経験および挫折経験のとらえ方がスチューデント・アパシー傾向と生きがい感にどのように影響しているのかを質問紙を用いて検証する。

## II. 仮説

挫折をポジティブなものとしてとらえている者は、生きがい感が高く、スチューデント・アパシー傾向が低い。

## III. 方法

### 1. 調査対象者

A女子大学の学生1～4年生312名を対象に質問紙調査を行った。

### 2. 調査時期

2019年5月～6月

### 3. 手続き

講義後に自己記入式の質問紙による調査に協力依頼をした。質問紙への回答をもって調査への同意を得たものとし、回答はすべて無記名で行われた。

### 4. 質問紙

#### (1) フェイスシート

年齢、学年、挫折経験の有無、挫折経験をした年齢と内容

#### (2) 挫折経験のとらえ方尺度 (姜・清沢、2017)

一般的な挫折経験のとらえ方を測定する

尺度。「ダメージ」、「自己成長」、「普遍」、「意欲喪失」の4下位尺度で構成された計18項目、5件法。「自己成長」をポジティブ、「ダメージ」・「意欲喪失」をネガティブなものとしてとらえていると考える。

#### (3) アパシー傾向測定尺度短縮版 (箭本・鈴木、2017)

鉄島 (1993) の作成したアパシー傾向測定尺度の短縮版である。一般大学生のアパシー傾向を測定する尺度。「授業からの退却」、「学業・課題からの退却」、「学業への積極的姿勢」の3下位尺度で構成された計20項目、6件法。

#### (4) 生きがい認知尺度 (熊野、2012)

生きがい感を測定する尺度。「人生肯定」、「存在価値」、「人生の意味」、「目標・夢」、「コミットメント」の5下位尺度で構成された計24項目、4件法。

#### (5) 倫理的配慮

本研究は跡見学園女子大学研究倫理審査委員会にて承認を得た (受付番号: (院)19-001)。

## IV. 結果

### 1. 挫折経験の有無における各尺度の平均得点の比較

挫折を経験したことがある群 (挫折あり群) 168名、挫折を経験したことがない群 (挫折なし群) 128名の2群に分けた。挫折あり群と挫折なし群の得点の差を検討するために、挫折経験のとらえ方尺度、アパシー傾向測定尺度、生きがい認知尺度の総合得点と下位尺度得点について、対応のない検定を行った。結果を表1に示す。

挫折経験のとらえ方尺度では、「ダメージ」 ( $t = 3.17$ ,  $df = 288$ ,  $p < .01$ )、「普

表1 挫折経験の有無における各尺度の平均得点の比較 (t検定)

		挫折あり群		挫折なし群		t値
		M	SD	M	SD	
挫折経験のとらえ方尺度	ダメージ	27.03	5	25.1	5.33	3.17**
	普遍	11.67	2.66	10.71	2.58	3.12**
	意欲喪失	7.74	2.07	6.96	2.03	3.21**
アパシー傾向測定尺度	学業への積極的姿勢	14.95	4.34	13.64	3.81	2.7**
生きがい認知尺度	人生肯定	13.97	4.14	15.13	3.63	2.52*
	人生の意味	10.18	3.82	11.14	3.61	2.2*

\*\*p<.01、\*p<.05

遍」(t=3.12、df=290、p<.01)、「意欲喪失」(t=3.21、df=292、p<.01)においていずれも挫折あり群の方が有意に高い得点であった。アパシー傾向測定尺度では、「学業への積極的姿勢」(t=2.7、df=292、p<.01)において挫折あり群の方が有意に高い得点であった。生きがい認知尺度では、「人生肯定」(t=2.52、df=291、p<.05)、「人生の意味」(t=2.2、df=292、p<.05)においていずれも挫折なし群の方が有意に高い得点であった。

## 2. アパシー傾向測定尺度、生きがい認知尺度を従属変数とし、挫折経験のとらえ方尺度を独立変数とした重回帰分析

挫折経験のとらえ方がアパシー傾向と生きがい感にどう影響しているかを明らかに

するため、アパシー傾向測定尺度の総合得点および下位尺度、生きがい認知尺度の総合得点および下位尺度を従属変数とし、挫折経験のとらえ方尺度の下位尺度を独立変数とした強制投入法による重回帰分析を行った。結果を表2に示す。

挫折経験のとらえ方尺度の下位尺度である「ダメージ」は、アパシー傾向測定尺度の下位尺度である「学業・課題からの退却」に有意な正の影響を与え、生きがい認知尺度の合計総合得点である「生きがい感」、生きがい認知尺度の下位尺度である「人生肯定」、「人生の意味」、「存在価値」に有意な負の影響を与えていた。挫折経験のとらえ方尺度の下位尺度である「自己成長」は、生きがい認知尺度の合計総合得点である「生きがい感」、生きがい認知尺度

表2 アパシー傾向測定尺度、生きがい認知尺度を従属変数とし、挫折経験のとらえ方尺度を独立変数とした重回帰分析

アパシー傾向測定尺度		生きがい認知尺度				
	学業・課題からの退却	生きがい感	人生肯定	目標・夢	人生の意味	存在価値
	$\beta$	$\beta$				
ダメージ	.2*	-.23**	-.27**		-.17*	-.21*
自己成長		.24**	.14*	.27***	.25***	.24**
R <sup>2</sup>	.08***	.16***	.11***	.11**	.14***	.14***

\*\*\*p<.001、\*\*p<.01、\*p<.05

$\beta$ ：標準化回帰係数

生きがい感：生きがい認知尺度総合得点

の下位尺度である「人生肯定」、「目標・夢」、「人生の意味」、「存在価値」に有意な正の影響を与えていた。

### 3. 挫折経験を低年齢時にした群（低年齢群）、挫折経験を高年齢時にした群（高年齢群）における各尺度の平均得点の比較

挫折経験がある者に一番大きな挫折を経験した時の年齢を聞いたところ、6歳といった幼い時に経験した者もいれば21歳といった最近経験した者もあり、様々な回答がみられた。この結果から、挫折を経験した年齢によっても尺度の平均得点に違いがみられるのではないかと考えられたため、6歳から16歳までを低年齢群、17歳から21歳までを高年齢群とし、挫折経験のとらえ方尺度の下位尺度、アパシー傾向測定尺度、生きがい認知尺度の総合得点および下位尺度について対応のないt検定を行った。結果を表3に示す。

挫折経験のとらえ方尺度では、「自己成長」(t=2.08, df=137, p<.05)において高年齢群の方が有意に高い得点であった。アパシー傾向測定尺度では、「学業への積

極的姿勢」(t=1.99, df=137, p<.05)において高年齢群の方が有意に高い得点であった。生きがい認知尺度では、「生きがい感」(t=2.04, df=133, p<.05)、「目標・夢」(t=3.33, df=138, p<.01)、「存在価値」(t=2.06, df=137, p<.05)においていずれも高年齢群の方が有意に高い得点であった。

## V. 考察

### 1. 仮説の検討

本研究の仮説は、「挫折をポジティブなものとしてとらえている者は、生きがい感が高く、スチューデント・アパシー傾向が低い。」であった。仮説を検証するために重回帰分析を行ったところ、挫折経験のとらえ方尺度の下位尺度である「ダメージ」がアパシー傾向測定尺度の下位尺度である「学業・課題からの退却」に有意な正の影響を与え、生きがい認知尺度の総合得点である「生きがい感」と生きがい認知尺度の下位尺度である「人生肯定」「人生の意味」「存在価値」に有意な負の影響を与えていることが明らかになった。加えて、挫折経験のとらえ方尺度の下位尺度である

表3 挫折経験を低年齢時にした群（低年齢群）、挫折経験を高年齢時にした群（高年齢群）における各尺度の平均得点の比較（t検定）

	低年齢群		高年齢群		t値	
	M	SD	M	SD		
挫折経験のとらえ方尺度 自己成長	21.6	5.63	23.41	4.57	2.08*	
アパシー傾向測定尺度 学業への積極的姿勢	14.06	4	15.59	4.61	1.99*	
生きがい認知尺度	生きがい感	56.56	14.95	62.02	15.05	2.04*
	目標・夢	11.15	63	13.36	3.74	3.33**
	存在価値	13.45	3.9	14.95	4.34	2.06*

\*\*p<.01、\*p<.05

生きがい感：生きがい認知尺度総合得点

「自己成長」が生きがい認知尺度の総合得点である「生きがい感」と生きがい認知尺度の下位尺度である「人生肯定」「目標・夢」「人生の意味」「存在価値」に有意な正の影響を与えていることが明らかになった。

これらの結果から、挫折をポジティブなものとしてとらえている者は生きがい感が高く、挫折をネガティブなものとしてとらえているものはアパシー傾向が低くなることが推察され、仮説は支持されたといえるだろう。この結果は、姜・清沢（2017）の挫折経験を「自己成長」のように積極的にポジティブなものとしてとらえることは、自己や対人場面においてポジティブな影響を及ぼし、ネガティブなとらえ方は「自己脆弱感」につながりやすく、「ダメージ」のようなとらえ方は、対人場面にもネガティブな影響を及ぼすという結果を支持したものとなった。本研究では、挫折経験のとらえ方が生きがい感やスチューデント・アパシー傾向にも影響を及ぼすことが明らかになった。青年期のアイデンティティ確立に関係する概念であったため、関連が見られたと考えられる。

## 2. 総合考察

本研究の目的は、青年期女子における挫折経験がスチューデント・アパシー傾向と生きがい感に及ぼす影響を検討することであった。

挫折を経験したことがある群と挫折を経験したことがない群を比較することによって、挫折を経験したことがある者ほど挫折をネガティブなものとしてとらえ、生きがい感が低くなる傾向があることが明らかになった。挫折を経験した者は挫折を経験す

ることの苦痛さを知っているため、挫折を経験していない者よりも挫折をネガティブな捉え方をし、挫折を経験することは自信喪失につながるため、人生に対する考えがネガティブなものになってしまうことが考えられる。また、挫折を経験したことがある者ほど「学業への積極的姿勢」が高いことが明らかになった。挫折を経験したことが学業を積極的に取り組もうとする姿勢につながる可能性が示され、挫折を経験することはネガティブな影響だけでなく、ポジティブな影響も及ぼすことが示唆された。

また、挫折経験のとらえ方が及ぼす影響を検討したところ、挫折を「ダメージ」と挫折をネガティブに捉えていることは、学業・課題からの退却につながり、人生に対する考えもネガティブなものとなること、「自己成長」と挫折をポジティブに考えることは生きがい感に大きな影響を与え、生きがい感を高めることにつながるということが明らかになった。挫折経験をネガティブにとらえることはネガティブな影響を及ぼし、挫折経験をポジティブにとらえることはポジティブな影響を及ぼすことが示唆された。また、挫折経験を低年齢時にした群（16歳以下）と挫折経験を高年齢時にした群（17歳以上）を比較することによって、挫折経験を高年齢時にした者ほど挫折をポジティブにとらえること、学業に積極的に取り組む姿勢があること、生きがい感が高いことが明らかになった。これらのことから、高年齢時に経験した挫折よりも低年齢時に経験した挫折の方が心理的に苦痛を与え、挫折を乗り越えられていない可能性が示唆された。

本研究の結果から、挫折をポジティブな

ものとしてとらえている者は生きがい感が高く、挫折をネガティブなものとしてとらえているものはアパシー傾向が低くなることが明らかになった。また、挫折を経験することで心理的苦痛をうけるものの挫折をポジティブに考えることができ、ポジティブに考えることで生きがい感を高くし、スチューデント・アパシー傾向を低くすることができることが示唆された。挫折を経験した者に対して挫折をポジティブにとらえられるようにすることが有用な支援方法であることが考えられる。また、本研究では低年齢時に経験した挫折が青年期女子にネガティブな影響を与えていることが明らかになった。挫折を低年齢時に経験した者への支援を今後考えていく必要があると考えられる。また、どういった挫折が青年期女子に苦痛を与えるのか、どういった挫折の対処方法が青年期女子にとって良い影響をもたらすのかを検討することにより、より良い支援につなげることができると考えられる。

本研究の課題として、青年期女子にのみ調査を行っているため、青年期女子の支援しか考えることができない点がある。今後青年期男子にも同様の調査を行うことによって、青年期全体の支援に役立てることができるだろう。

## 謝辞

A女子大学の1～4年生の皆様、ゼミの皆様のご協力頂きましたこと、心よりお礼申し上げます。

## 引用文献

神谷俊次・伊藤美奈子 (1999) : 挫折体験

の受容と有能感. 日本教育心理学会総会論文集 41, 548

姜 信善・清沢彩夏 (2017) : 挫折経験のとらえ方が個人に及ぼす影響についての検討. 富山大学人間発達科学部紀要 11 (2), 1-11

神原知愛 (2009) : 大学生の挫折経験に関する心理学的考察—挫折観と自己成長感との関連— 慶応大学大学院社会学研究科紀要 第67号

熊野道子 (2005) : 生きがいを決めるのは過去の体験か未来の予期か? 健康心理学研究18 (1), 12-23

熊野道子 (2012) : 生きがい形成の心理学. 風間書房

高塚雄介 (2018) : 「心の健康」「ひきこもり」研究小史 敬心・研究ジャーナル 2 (2), 1-9

鉄島清毅 (1993) : 大学生のアパシー傾向に関する研究—関連する諸要因の検討— 教育心理学研究 41, 200-208

西村信子 (2012) : 大学生のアパシー傾向に関する一考察. 日本教育心理学会総会発表論文集 54, 258

荻原俊彦・加藤将太 (2013) : 青年の挫折経験とレジリエンス、時間的展望、アイデンティティとの関連. 日本教育心理学会総会発表論文集55 (0), 391

馬場謙一 (1976) : 自我同一性の形成と危機 —E.H.エリクソンの青年期論をめぐって—. 笠原嘉ら (編) 青年期の精神病理 I 至文堂 111-128

藤原嘉悦 (1970) : 生きがいの創造. 青年の意識と行動 3 大日本図書, 193

古木美緒・森田美弥子 (2009) : 挫折経験から自己受容に至るプロセス—大学生

を対象にして一. 日本教育心理学総会  
発表論文集 51, 177  
箭本佳己・鈴木由美 (2017) : 大学生のア

パシー傾向とUPIとの関連. 都留文科  
大學研究紀要 85, 243-254